

[第3種郵便物認可]

絵手紙で語る 生きる喜び

髓移植を受けた97年12月3日を、中溝さんは「私の第二の誕生日」と呼ぶ。この日を境に、減る一方だった血小板も赤血球も増加し、AB型だった血液型は妹と同じB型になつた。だが、一方でそれは、骨髄移植の合併症である移植片対宿主病（GVHD）と格闘する日々の始まりでもあつた。一時は口内の炎症で水を飲むことすらままならず、入院生活は約3年に及んだ。

異形成症候群と診断された。プロとしてまさに「これから」いう時、輸血をしながら試合に出続けた。しかし、貧血や出血傾向など症状が悪化。95年11月の伊藤園レディースが最後の試合となつた。

滋賀県出身。中学2年でゴルフを始め、県立能登川高卒業後の88年、7回目の挑戦で日本女子プロゴルフ協会のプロテストにトップ合格した。だが、ツアー3年目に体調を崩し、シーズン終盤に骨髓炎

自称、「日本一ゴルフをしていないプロゴルファー」だ。NPO法人「食といのちのお結び隊」（東京都港区）代表として、骨髄移植の啓蒙活動に尽力する中溝裕子さん（56）。公益財団法人・日本骨髄バンクの評議員でもある。プロ3年目の1991年に血液がんの一種、骨髄異形成症候群と診断され、97年に骨髄移植を受けた。今も続く合併症の影響もあってツアー復帰は果たせていないが、入院生活の間に出会った絵手紙や講演で、生きる喜びを語り続ける。

表現することは、講演活動と並んで中溝さんのライフワークとなつた。

クラブでなく繪筆を持つのが本職のようになつても、プロゴルファーであり続ける理由。「それが、生きてきた証だから」と語る中溝さんに迷いはない。苦しい入院生活では、「再びグリーンに立つ」と感じる事が支えになつた。試合は難しくても、クラブを振れるまでに回復してからは、女子プロ仲間らの協力を得て、骨髄バンク支援のためのチャリティーコンペを開催することも活動の柱の一つとなつた。2007年からは毎年、「第二の誕生日」の12月3日に女子プロ約20人を含めて120人規模のコンペを開催してきた。

こうした活動を「より公共

骨髓移植乗り越え

ちのお結び隊を立ち上げた。事務局長の村崎朋子理事は、12月3日のコンペを事務方として支えてきたゴルフ仲間。猿回しのパフォーマンスで知られる「モンキー・エンタープライズ」の代表でもある。村崎理事をはじめ、ゴルフを通じて出会った女性経営者やその会社のスタッフらが、NPOの活動を支えている。

講演では、骨髄移植を受けるまでの葛藤やゴルフへの思い、移植後の入院生活、よく食べられるようになつた時に感じた命のありがたさなどを語る。

骨髄移植のドナーとして骨髓バンクに登録できるのは、18歳から54歳まで。普及には若者の理解を得ることが重要だ。20年に香川県の高校で開催した講演会では、「諦めな

「ピントアート」を利用して、絵手紙作品を披露したり、地道な活動を続いている。 絵手紙も講演もダジャレが満載。「アナログな面白さが、聞く人に響くんですよ」と底抜けの明るさが持ち味の中溝さん。一方で、病の影響は診

後遺症で極度に乾きやつた目は「右は見えない」と語る。でも、「ご飯が食べらうた時を思えば、なんない」。死の淵から生当事者から出る言葉だそ、より説得力を持つ中溝さんは知つていて、「からい」と、できなくなつたを嘆くのではなく、「は見える」とできる向きに受け止め、諦めこの大きさを訴える。ゴルファーであることを、絵と言葉で思いをこしで、「プロゴルフあること」を生かし続ける。そのたぐましさこそ、証しかもしれない。



NPO法人「食といのちのお結び隊」事務局でスタッフらと絵手紙教室の作品を掲げる中瀬裕子さん（手前）＝東京都港区で5月

「この人の大きさを知った」「ドナー登録できるよう、健康な体作りをしたい」といった感想が寄せられ、翌年に同県で開かれたドナー登録会には、「中溝さんの講演を聞いた」という生徒も訪れたという。「若い人たちの真剣なまなざしを感じている。『実際に体験した人の話を聞きたかった』と言つてもらえた」と手応えをつかむ。

夕、辞任相の後任を立候補をに8人が止ませた。
立候補 前財務相 防相▽トニンハートトハント元外務相▽ブレ
長官▽ベー
員——の。 11人が出

四

米一